

日本 MIST 研究会 ● 監

星野雅洋, 佐藤公治, 齋藤貴徳, 有菌 剛, 石井 賢 ● 編

MIST 手技における経皮的椎弓根 スクリュー法—基礎と臨床応用

評 者

原 政人 (稲沢市民病院副院長/脳神経外科部長)



● PPS 法の利点・欠点を余すところなく伝える実践書

低侵襲手術の必要性が叫ばれて久しいが、時に未熟な手術操作にて取り返しのつかない事態を招いている。大きく展開し、良好なオリエンテーションを保ちながら行う手術は、安全性の面で優れ、指導もしやすい。しかし、大きく展開するための弊害として、出血量や組織への侵襲の増大があり、とりわけ高齢化の進んでいるわが国では、これらを克服することが喫緊の課題である。患者に対する低侵襲が、術者にとってのストレスにならないよう、手術手技を確立していくことは、非常に重要である。

本書の著者らは、脊椎手術において日本をリードしているメンバーであり、これまでも本術式以外の手術も多く経験している強者ばかりである。低侵襲手術に対する熱意を持っているとともに、陥りやすい危険性を理解し、未然に大事故を防ぐ力を持ち合わせている。また、問題の多い高齢者に対する侵襲のより少ない手術手技やデバイスを開発している挑戦者でもある。彼らだからこそわかる MIST 手技

における経皮的椎弓根スクリュー法 (PPS 法) の利点および欠点を余すところなく伝えており、今考えられる弱点に対する改良や、今後の展開を見据えたデバイスのさらなる発展についても言及しており、非常に参考になる。

腰椎変性疾患、脊椎外傷、脊椎腫瘍、脊椎感染症など、すべての症例において PPS 法は利用することができるが、現時点ですべてがこれにより理想的に治療されるわけではないことも、知っておかなければならない。脊椎感染症や一部の外傷例では非常に有利な手技となることが示されているが、高度の脊柱変形や、高齢者の脆弱性脊椎に対する変形矯正に関しては、まだまだ解決されなければならない課題が山積しているのも事実である。高度の脊柱変形に対しては、現時点では矯正不足になることも多く、高齢脊柱変形では instrumentation failure を来しやすい。超高齢社会となっている日本において、脆弱性脊椎に対する固定の必要性が皮肉なことに増えており、バイオニアである日本が、この分野における低侵襲手術を確立していかなければならない。

本書では、PPS 法における基本が十分に記されており、個々の症例におけるの手術手技の選択、アプローチの問題点、合併症の予防対策、安全性の確保など、読者の助けとなる内容が満載である。高度なテクニックを駆使しなければならない応用編も紹介されているが、まずは頭の中で基本を理解し、カダバートレーニングでの実践を経て手術に臨んでいただきたい。PPS 法は発展の余地が大いにある分野であり、個々人がよりよい手技を模索していくことが必要である。

最後に、監修の日本 MIST 研究会は、学閥、診療科を超えたオープンな組織である。全国に地域会があり、筆者も中部 MIST 研究会の世話人をしていが、整形外科医が中心で、脳神経外科医の参加者はまだ少ない。今後の脊椎脊髄外科専門医制度の施行に備え、また患者のニーズに応えるためにも、脊椎脊髄外科医のビギナーからベテランまで役立つ本書を推薦したい。

B5 頁 284 2015 年 三輪書店刊
定価：本体 12,000 円＋税
[ISBN978-4-89590-532-9]

お知らせ

本誌投稿欄に「Technical Note」がございます。手術手技、機器、周術期管理など手術にかかわる独自の工夫をご報告いただく欄です。ご投稿に際しては、本文（文献含む）3,200 字以内、表・図・写真 5 点以内でおまとめください。

「脳神経外科」編集室